

3.1 LIME データセットの作成

LIME データセットは LIME ユティリティ、コマンドで作成することができますが、ASPEN のユティリティ機能で作成することもできます。ここでは ASPEN のユティリティ機能で作成する方法を説明します。

ASPEN のトップ画面（機能選択メニュー）で 6 番の「ユティリティ」を選択します。

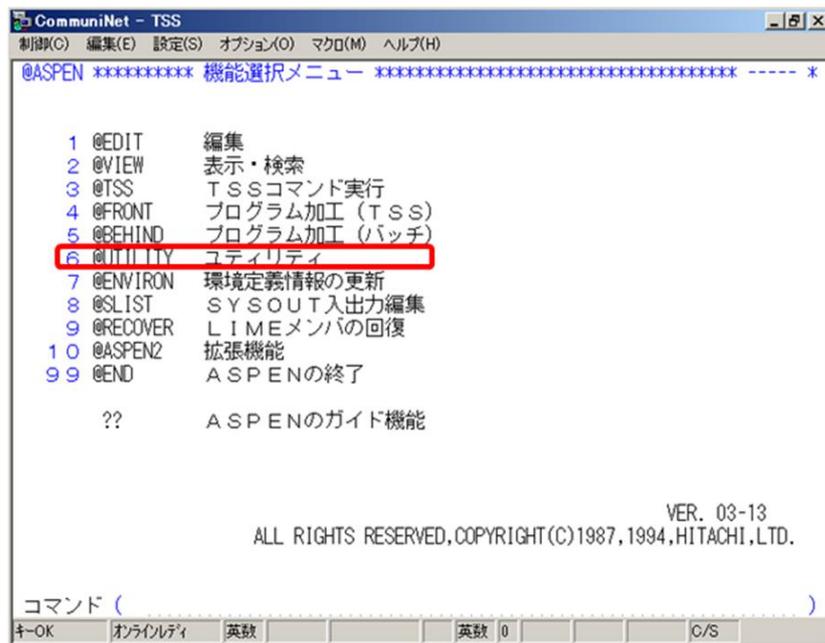


図 3.1-1 ASPEN の TOP 画面（機能選択メニュー）

3 番の「データセットの割り当て、カタログ、アンカタログ」を選択します。

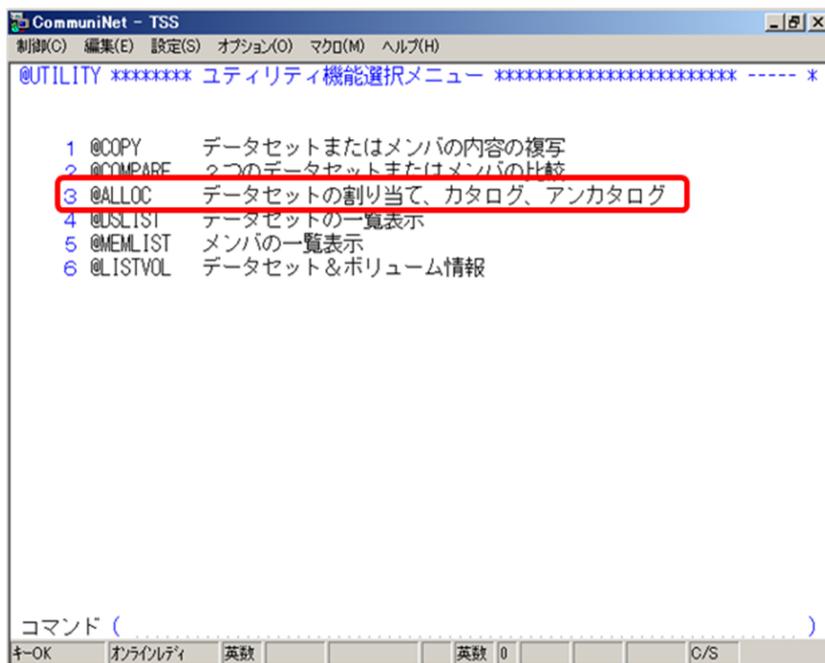


図 3.1-2 「ユティリティ機能選択メニュー」画面

以下は LIME データセットの割り当ての一例です。データセット編成では「L」を指定します。

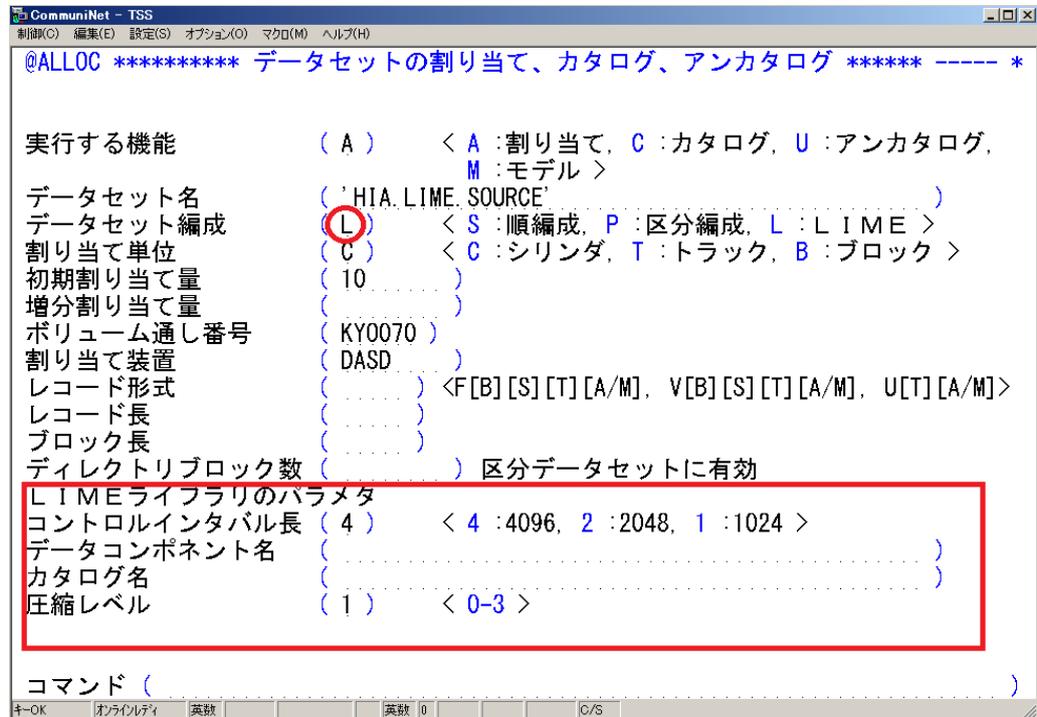
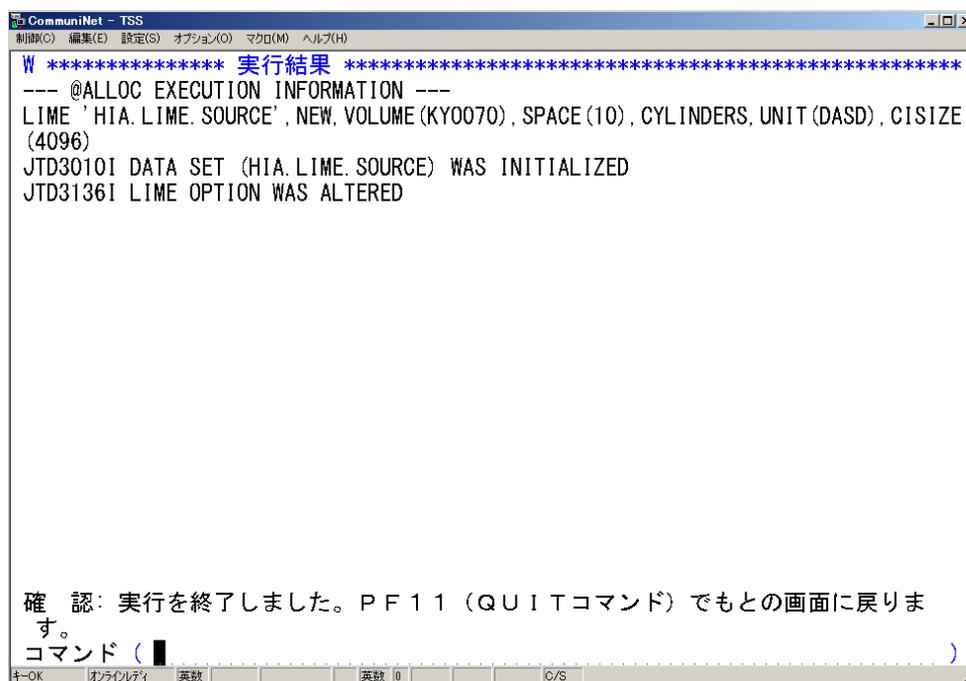


図 3.1-3 LIME データセットの割り当ての例

画面の下部「LIME ライブラリのパラメタ」が LIME データセット固有の設定情報になります。必要に応じて指定します。通常はデフォルトで差し支えありません。

- LIME ライブラリの CI 長は、1,024、2,048、4,096 のいずれかに限定されます。
- データコンポネント名：作成する LIME データセットのデータコンポネントの名称を指定します。
- カタログ名：作成する LIME データセットをカタログするカタログデータセットの名称を指定します。カタログについては 4 章で説明します。
- 圧縮レベル：数字が大きいほど、圧縮効果が高くなります。

送信キーを押下すると以下のように表示され、LIME データセットが作成されます。



```
CommuniNet - TSS
制御(C) 編集(E) 設定(S) オブジェクト(O) マクロ(M) ヘルプ(H)
W ***** 実行結果 *****
--- @ALLOC EXECUTION INFORMATION ---
LIME 'HIA.LIME.SOURCE', NEW, VOLUME (KY0070), SPACE (10), CYLINDERS, UNIT (DASD), CFSIZE
(4096)
JTD3010I DATA SET (HIA.LIME.SOURCE) WAS INITIALIZED
JTD3136I LIME OPTION WAS ALTERED

確認: 実行を終了しました。PF11 (QUITコマンド) でもとの画面に戻りま
す。
コマンド ( █ )
```

図 3.1-4 LIME データセットの割り当て結果の例

3.2 LIME の便利な機能（その1 LIME メンバの回復）

LIME メンバの回復機能は ASPEN の機能として提供されています。LIME メンバの回復機能では、メンバの回復の他、変更履歴の管理を行うことができます。操作例を以下に示します。

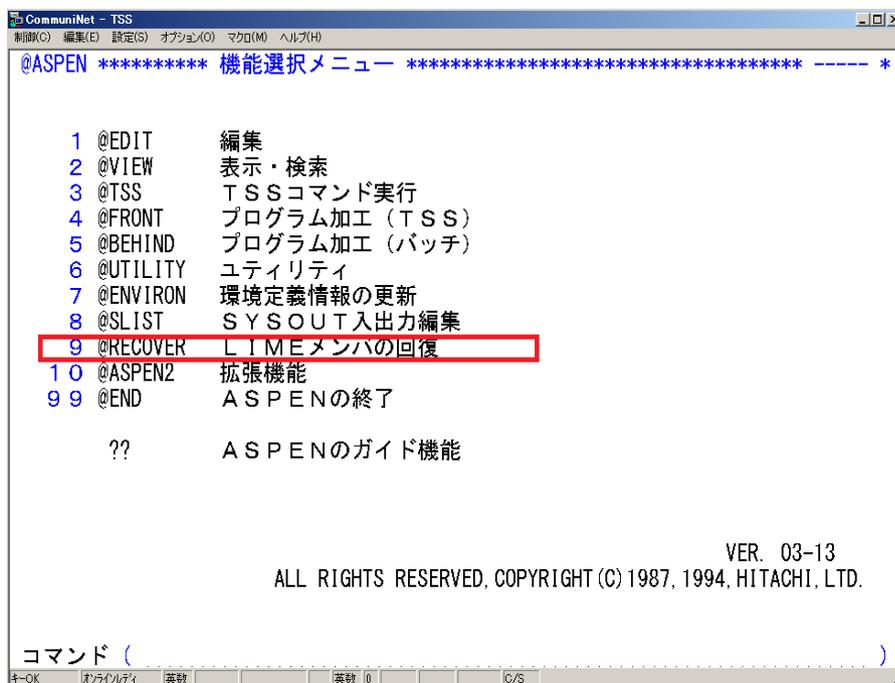


図 3.2-1 「LIME メンバの回復」の実行

下記は「変更履歴表示」の例です。変更歴を表示させたいデータセット名、メンバ名を指定します。

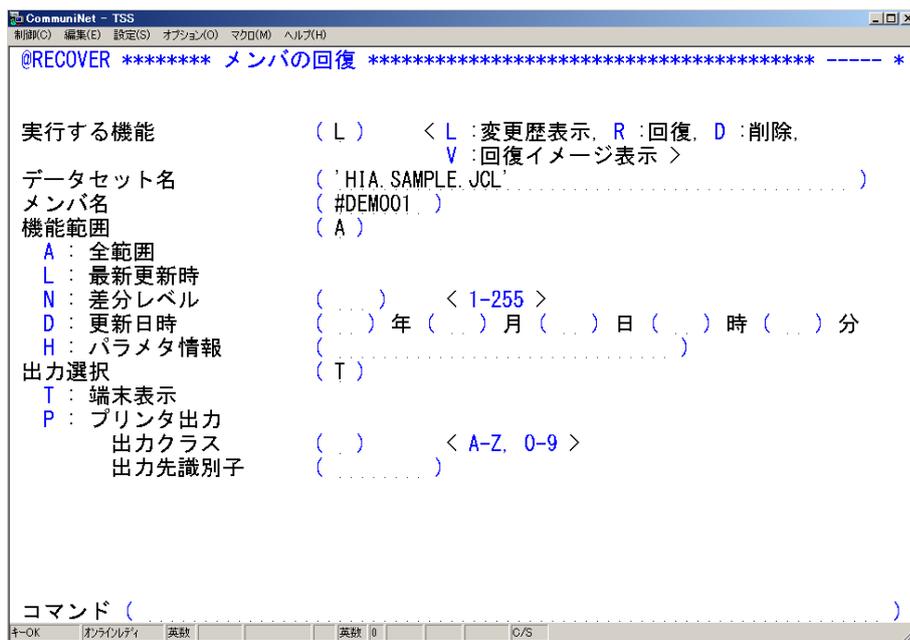


図 3.2-2 メンバの回復画面

変更歴が表示されます。

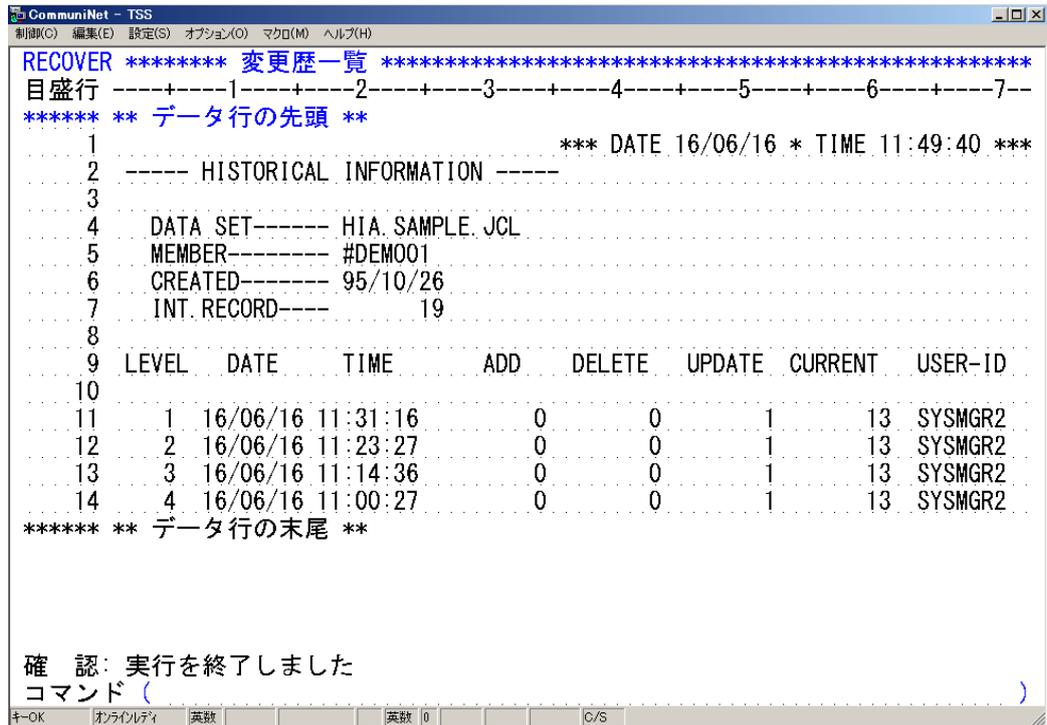


図 3.2-3 変更歴の表示例

次に「回復イメージ表示」機能について説明します。「回復機能」はいきなり回復されてしまうため、まず「回復イメージ表示」による確認を行ってから回復するほうが安全です。「回復イメージ表示」では、「この時点の状態に戻したい」という日時を指定します。

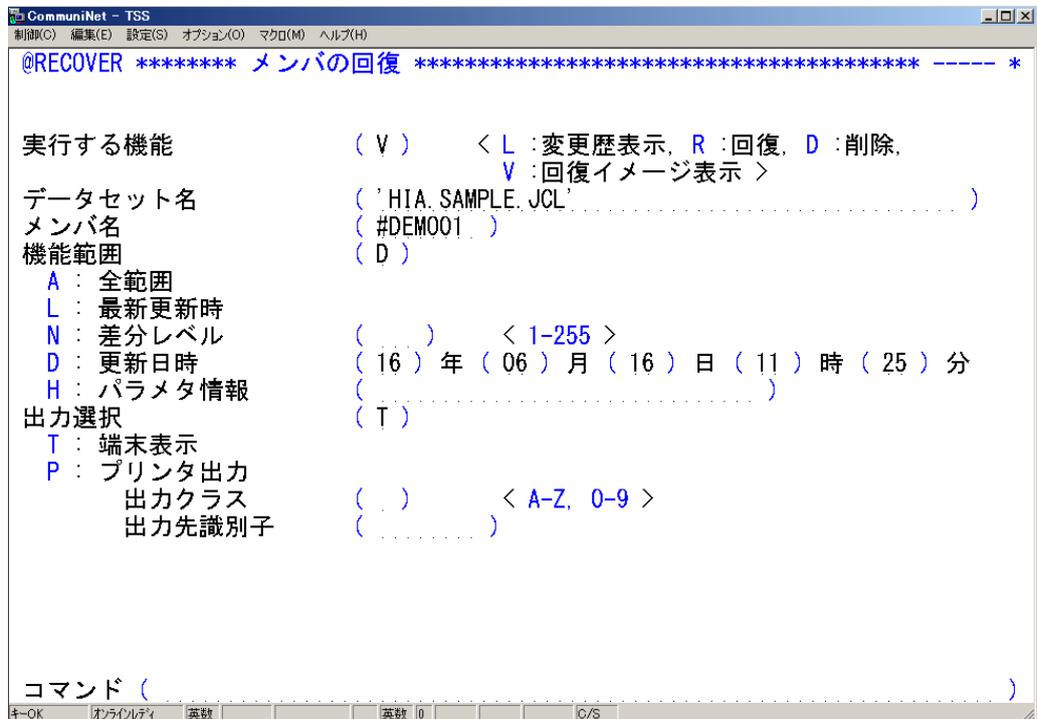


図 3.2-4 「回復イメージ表示」機能の操作例 1

「回復イメージ表示」では以下のような確認メッセージが出力されます。

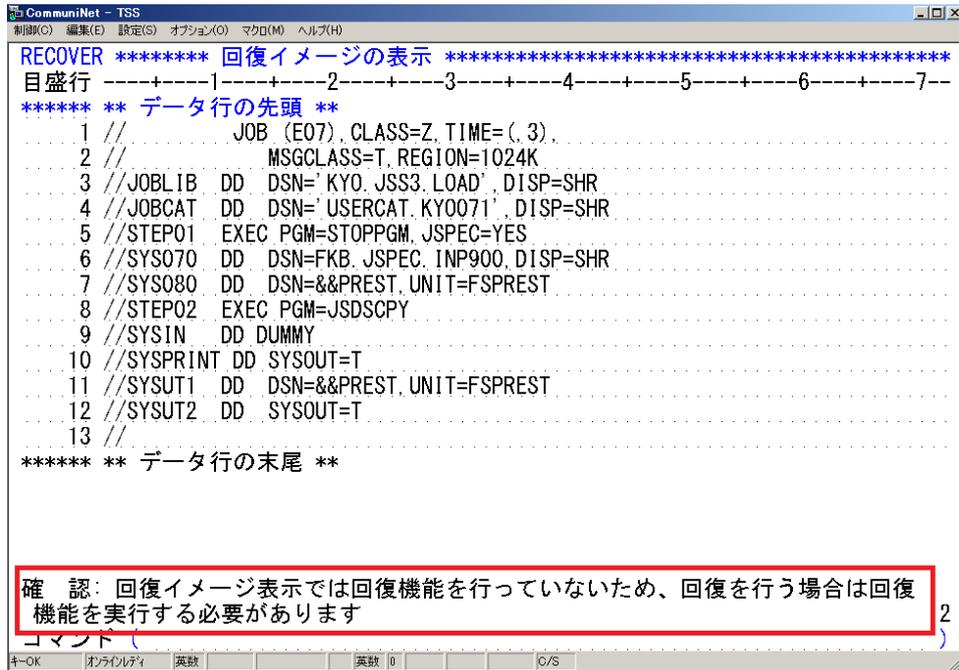


図 3.2-5 「回復イメージ表示」機能の操作例 2

「回復」機能の操作例を以下に示します。「回復」機能では、いきなり回復処理を行います。

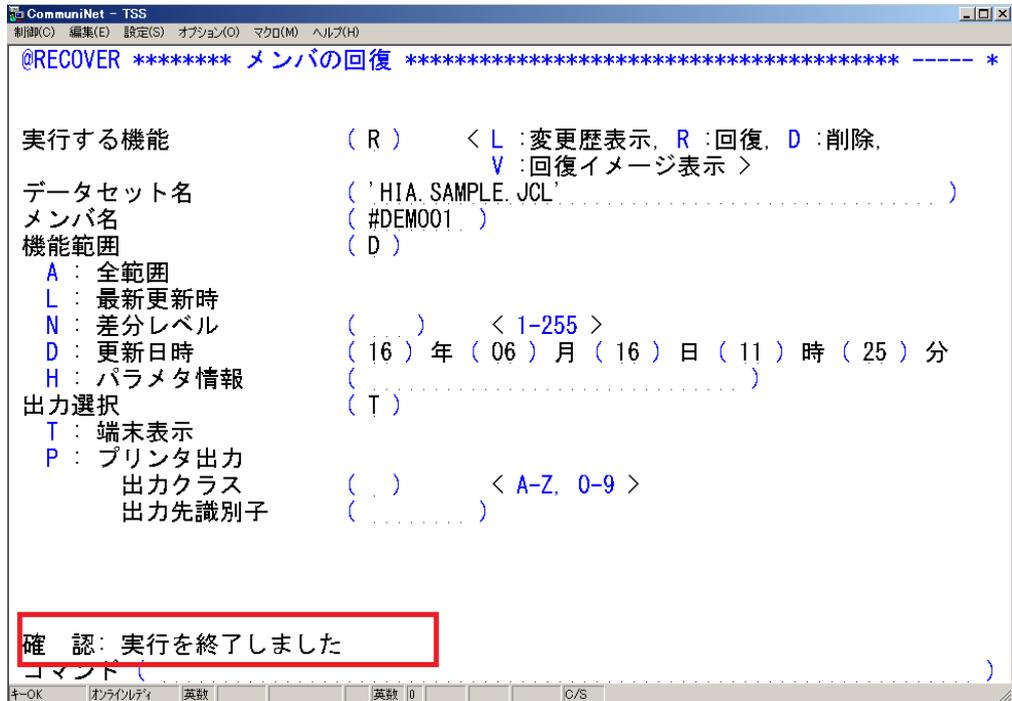


図 3.2-6 「回復」機能の操作例